

訶梨帝母の形相の二類性(中)

——宝楼閣経曼荼羅にみる訶梨帝母像をめぐって——

田代有樹女

目次

はじめに

一、宝楼閣経曼荼羅

1、曼荼羅(一)

2、曼荼羅(二)

3、曼荼羅(三)

4、曼荼羅(四)

二、宝楼閣経曼荼羅にみる訶梨帝母像について

結び

はじめに

忿怒相訶梨帝母⁽¹⁾のうち、十六大護図にみられる忿怒尊訶梨帝母像をとりあげ、その像容と修法についてはすでに論じた⁽²⁾。

また鬼形鬼子母神に代表される忿怒尊を祈禱や修法の尊像とし、柔和尊は民間の子育て信仰の女神であると一般的には解されているが、儀軌^{ぎき}などでは修法のための形像事の中で、柔和相のものを本尊として主に説いていることに⁽³⁾ ついてもすでに述べてきた。

『覺禪鈔』の中では、修法のための訶梨帝母像として、「訶梨帝母法」、「訶梨帝母經」、「歡喜母法」からの引用文で柔和尊を説き、図示している⁽⁴⁾。

それらと並べて、七子を伴う像を、「寶樓閣經」から、次のように引いている。

寶樓閣經中云^{菩提流支}於其東門外畫鬼子母神⁽⁵⁾。有七鬼子圍遶⁽⁶⁾云々……⁽⁷⁾。

寬祐樓閣經像持日輪。或云。非寶日輪。吉祥菓也。……

この像は宝樓閣經曼荼羅⁽⁸⁾に含まれているもので、經典の中では尊容についての詳細は説かれていないが、左舒相

で、右手に日輪を持ち、火焰に包まれた輪光を有する像容は、忿怒の意味を持つものとみることができよう。⁽⁹⁾

これらのことは、修法に用いられる訶梨帝母像を、かならずしも忿怒尊とばかりしていないことと併せて、鬼形鬼子母神のみを忿怒尊とすべきではなく、鬼形鬼子母神の確立⁽¹⁰⁾より遡った九世紀頃には、すでに儀軌にも忿怒相訶梨帝母像は所載されていたことをも、明らかに示している。

忿怒相訶梨帝母は、現在では一仏を尊像としているが、⁽¹²⁾十羅刹女との融合、あるいは拙稿で述べた十六大護図などのように、従来より、他の忿怒尊と共に造像され、修法に広く用いられて来たものと察せられる。

本論では、『寶樓閣經』中の忿怒相訶梨帝母像に焦点をあて、その像容と尊格に併せて、宝樓閣經曼荼羅についても言及していきたい。

まず次に、宝樓閣經曼荼羅についてふれておきたい。

(注)

(1) 訶梨帝母をあらわす名称としては、ハーリティー (Hariti)、鬼子母神などあるが、本論では訶梨帝母と記す。訶梨帝母の名称の詳細については、拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥菓』について」(『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第七号、昭和五九年)一〇七頁参照。

訶梨帝母には柔和相と忿怒相の二類が認められる。

前掲拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥菓』について」拙稿「訶梨帝母の形相の二類性について」(上)——十六大護図にみる忿怒尊訶梨帝母像をめぐる——」(『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第八号、昭和六〇年)、拙稿「ネパールにおけるハーリティーについて——調査報告——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第六号、昭和五九年)。

(2) 前掲拙稿「訶梨帝母の形相の二類性について」(上)——十六大護図にみる忿怒尊訶梨帝母像をめぐる——」。

(3) 同右。

(4) 『大正藏』圖像部五、四六一頁。

(5) 『覺禪鈔』では、鬼子○神。菩提流志訳『寶樓閣經』では、鬼子母神。不空訳では、訶利帝母。

(6) 『大正藏』一九、菩提流志訳では縛。不空訳では邊。

(7) 以下、……此像圓成寺五佛院本寶樓閣曼荼羅有之。……。

(8) 宝樓閣經曼荼羅は、宝樓閣曼荼羅とも言う。本論では前者を用いることとする。

(9) 『大正藏』圖像部五、四六三頁。

(10) 鬼形への変換は、室町時代か、江戸時代初期とされている。

宮崎英修「鬼形鬼子母神の出現」(『鬼子母神信仰』民衆宗教史叢書第九卷)昭和六〇年、雄山閣出版。

同右「日蓮宗における訶梨帝母信仰の変遷——鬼子母神、十羅刹女の融合と分離——」(『日本佛教学会年報』第十八号)。

同右『日蓮宗の守護神——鬼子母神と大黒天——』昭和五五年、平楽寺書店。

(11) 『覺禪鈔』は一二一七年に、『阿婆縛抄』は一二七五年に(一二七五年、一二六〇年、一二八一年などの諸説あり)それぞれ成っている。

(12) 中山総髮合掌形の鬼形鬼子母神にみられる日蓮宗における尊像など。

一、宝楼閣経曼荼羅

宝楼閣経曼荼羅は、正依『大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經』⁽¹⁾三卷・不空訳、傍依『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』⁽²⁾三卷・菩提流志訳及び梁録失訳『牟梨曼荼羅呪經』⁽³⁾一卷(併せて以下『寶樓閣経』と記す)を本拠とした修法に用いられる曼荼羅である。

図様には、諸尊を描いた形像曼荼羅と種子曼荼羅とがあるが、配されている尊像と位置は一定ではない。また形像曼荼羅のみを取りあげてみても、若干の相違が認められる。

京都大通寺蔵本の興然訳『曼荼羅集』⁽⁵⁾所載の「寶樓閣経曼荼羅(其一)」⁽⁶⁾(図1—①)に類するものは、楼閣が中心に描かれ諸尊を配した素朴な叙景曼荼羅であるが、個人蔵『寶樓閣曼荼羅』(図2)に類するものは、中央に楼閣と諸尊を配した内院と、それを囲む外院との二重院から成っている。また京都東寺観智院蔵の『寶樓閣曼荼羅』(図3)は、一幅の卷子本の様式をとっている。

他に異形のものでは、内院、中院、外院の三重院から成る方曼荼羅をみることができ、この形式をとっているものには、興然訳『曼荼羅集』所載「寶樓閣曼荼羅(其二)」⁽⁷⁾(図4—①)に類するものと、種子曼荼羅(図4—②)をあげることができる。

これらを総て、宝楼閣経曼荼羅と呼んでいるが、どのような所縁をもって、これら異なる曼荼羅が各々造図されてきたのであろうか。

次に順に述べていきたい。

1、曼荼羅(一)

図1に類するものは興然訳『曼荼羅集』所載「寶樓閣曼荼羅(其二)」(図1—①)、『覺禪鈔』の「寶樓閣曼荼羅(其一)」、『阿娑縛抄』、『圖像抄』、『醍醐本圖像』、『別尊雜記』の各所載本などであるが、これらを宝樓閣經曼荼羅(一)として、考察していきたい。

まず様相を見ていくと、中段上部ほぼ中央には宝形造り重層の樓閣が描かれて、中には說法相釈迦如来坐像、その右辺に四面十二臂の金剛手菩薩(執金剛菩薩)⁽¹³⁾坐像、左辺に四面十六臂の宝金剛菩薩(摩尼金剛菩薩)⁽¹⁴⁾坐像の三尊が配されている。

釈迦如来の正面、樓閣下段には、火焰光に包まれた百輻輪を七宝蓮華が乗せ、その根元は方形の水池となっている。手前には、侍誦人(仙人)⁽¹⁵⁾が香炉あるいは宝珠や花枝を捧げて座し、宝輪の周囲には四天王が配置されている。如来に向かって右辺下、宝金剛菩薩の前方には、八臂跪坐像の餉棄尼天女と、その後に花鬘羅刹女が描かれ、左辺下方、金剛手菩薩前面には吉祥天女と、その後方に、四臂笑面の金剛使者天女が座している。

樓閣上段の虚空中には、梵天、毘紐天(帝釈天)⁽¹⁶⁾、大自在天が飛天として描かれている。

したがってこれらの曼荼羅は、おおよそ『寶樓閣經』巻中の「畫像品第八」⁽¹⁷⁾に拠る作図とみることができるが、「畫像品第八」の不空訳と菩提流志訳では若干異なる点が認められるので、次に対照させ、その違いを見ていきたい。

『大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經』卷中「畫像品第八」⁽¹⁸⁾不空訳

……畫七寶莊嚴樓閣。於樓閣中畫如來。作說法相坐師子座。佛右邊金剛手菩薩。十二臂黃白色。其像四面。正面歡喜。右邊面忿怒相。左邊面開口狗牙上出。當頭上面顰眉怒目。頭冠瓔珞種種莊嚴。於蓮華上半跏而坐。左邊畫寶金剛菩薩。四面十六臂。正面歡喜。右面青色作摩訶迦羅天面。左面綠色作師子面。頭上面顰眉露齒忿怒作淺綠色。右邊第一手持真多摩尼寶作獻佛勢。左邊第一手持蓮花。右第二手作安慰手。左第二手持三戟叉。二手合掌。餘手皆執諸器仗。右第四手持輪。左第四手持劍。右第五手持金剛杵。左第五手持花篋。右第六手持念珠。左第六手持軍遲。右第七手持刀。左第七手持梵夾。右第八手持

『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』卷中「畫像品第八」⁽¹⁹⁾菩提流志訳

……畫一如來。坐師子座作說法像。於像右邊畫執金剛菩薩。爲赤白紅色有十二臂皆執刀杖。有四面。正前一面端正歡喜。左邊一面作嗔相。右邊一面有牙上出。又一面皺眉可畏相。又怒兩目。以種種瓔珞而嚴飾之。坐蓮花臺半加而坐。如來左邊畫摩尼金剛菩薩。有四面前面歡喜。右面青色。作摩訶迦羅天面。左面綠色。半作師子面半作人面。後面嗔相。皺眉露齒作淺綠色。有十六臂。右手把如意珠作奉佛相。左手持蓮華。一手施無畏。謂仰展五指如低。二手合掌。餘手皆執諸器仗。所謂三鋒槩輪刀金剛杵華篋數珠澡瓶利劍經夾寶塔須彌山。於蓮華臺上半跏而坐。於其座下。作餉棄尼天女。有八臂。胡跪合掌作供養佛相。金

寶塔。左第八手持須彌山。於蓮華臺上半跏而坐。於其座下畫餉棄尼天女。有八臂跪坐合掌。作供養佛相。金剛手菩薩座下。作吉祥天女。跪坐持寶器。滿盛種種寶供養如來。於吉祥天女後。畫金剛使者天女。作笑面有四臂種種瓔珞而爲嚴飾。手持種種器仗。餉棄尼天女後。畫花齒天女。身著素服。以手持花瞻仰如來。於如來前。畫作七寶花。其花百葉以金爲臺。吠琉璃爲莖。其蓮華上畫作百幅輪。臍輞具足。輪外周匝皆有光焰。於蓮華根下。畫四大天王。悉被甲冑種種嚴飾手執器仗。蓮華下畫作水池。以七寶莊嚴。於池岸上應畫持誦人。跪坐手持香爐并持花枝。又持念珠。跪坐瞻仰如來。於寶樓閣上。於虛空中畫梵天毘紐天大自在天。散花供養。……

剛手菩薩座下。作吉祥天女。胡跪執種種寶器。供養如來相。於吉祥天女後。畫使者天女。作笑面有四臂。種種瓔珞而爲嚴飾。手持刀杖。使者餉棄尼天女後。畫花齒羅刹女。身著素服。以手持花瞻仰如來。於大像前畫作七寶蓮華。而有千葉。琉璃爲經。其上作千幅輪有輞。四面皆艷光。其下畫作四天王。種種嚴飾手執刀杖。七寶蓮華下作七寶池。於池岸上作多衆仙人。皆悉胡跪。或持花或持寶。或手持香鑪或手持數珠。各異嚴持瞻仰如來而爲供養。於大像上。畫梵天帝釋大自在天。散花供養。……

二經の作画上の相違点を簡単な表にして、諸尊の配置を示すと次のようである。

<p>不 空 訳</p>	<p>○本尊釈迦如来坐像楼閣中に安置</p> <p>○仏右辺―金剛手菩薩(四面十二臂)</p> <p>○仏左辺―宝金剛菩薩(四面十二臂)</p> <p>○吉祥天女後―金剛使者天女(笑面四臂)</p> <p>○餉棄尼天女後(八臂)―花齒天女</p> <p>○蓮華百葉・蓮華上百輻輪</p> <p>○池岸上に持誦人跪坐</p> <p>○虚空中に梵天、毘紐天、大自在天</p> <div data-bbox="168 268 482 734"> <p>自在天 大自在天 (四面十六臂) 餉棄尼天女 宝金剛菩薩 梵天 楼閣中釈迦如来 輪華 天王 持誦人 百蓮 毘紐天 (四面十二臂) 金剛手菩薩 吉祥天女 金剛使者天女 (笑面四臂)</p> </div>
<p>菩 提 流 志 訳</p>	<p>○楼閣なし</p> <p>○執金剛菩薩(四面十二臂)</p> <p>○摩尼金剛菩薩(四面十六臂)</p> <p>○使者天女</p> <p>○花齒羅刹女</p> <p>○千葉・千輻輪</p> <p>○池岸上に多衆仙人</p> <p>○大像上に梵天、帝釈天、大自在天</p> <div data-bbox="168 893 482 1359"> <p>自在天 大自在天 (四面十六臂) 餉棄尼天女 摩尼金剛菩薩 梵天 釈迦如来 輪華 天王 多衆仙人 千蓮 帝釈天 執金剛菩薩 (四面十二臂) 吉祥天女 使者天女 (笑面四臂)</p> </div> <p>参 考 図 (I)</p>

この画像法を充している図は、『曼荼羅集』(其一)⁽²⁰⁾、『覺禪鈔』(其一)⁽²¹⁾、そして『別尊雜記』(其二)⁽²²⁾(図1—②)といふことができる。

前二者は、不空訳に拠っていることが明らかとなり、後者においては、從來、特異のものとされてきたが、中央には樓閣を表しておらず、また手前の蓮池は広がり、池岸には多数の仙人を配すなど、特に菩提流志訳を忠実に描き上げたものとして、注目に価する。

『醍醐本圖像』では梵天が、『阿婆縛抄』と『圖像抄』では梵天と持誦人が省かれている。『別尊雜記』(其一)では、持誦人が省かれていることと併せ、飛天が二雲上に三天ずつ配されている。

このように見えてくると、「畫像品第八」を拠依とした宝樓閣經曼荼羅には、訶梨帝母像は含まれておらず、さきに述べた『覺禪鈔』の引用は、この曼荼羅には該当していないことが判明する。

次に図2に類するものを宝樓閣經曼荼羅^(二)とし、考察していきたい。

(注)

- (1) 『大正藏』一九、六一九頁、上段—六三四頁、中段、六行目。
- (2) 同右、六三六頁、中段—六五七頁、下段、七行目。
- (3) 同右、六五七頁、下段、八行目—六六八頁、中段、一八行目。
他に梁録失訳『寶樓閣經梵字真言』(『大正藏』一九、六三四頁、中段、七行目—六三六頁、上段、最後)があげられる。
- (4) 『秘密儀軌隨聞記第十五』『真言宗全書』三、三二四頁「寶樓閣經」において「此ノ經ノ初メニ寶樓閣ノ圖有」と言うのは、大寶廣博樓閣善往祕密陀羅尼輪のことで、宝樓閣經曼荼羅とは異とする。
- (5) 『大正藏』圖像部四、一六三頁—二七六頁。

- (6) 興然訳『曼荼羅集』巻中「寶樓閣經曼荼羅(其二)」(『大正藏』圖像部四、二二〇頁)。
- (7) 現安藤積産合資会社蔵、旧東寺宝菩提院蔵、重文『寶樓閣曼荼羅』。
- (8) 『大正藏』圖像部四、七六二頁。
- (9) 『大正藏』圖像部九、一五二頁。
- (10) 『大正藏』圖像部三、一二頁。
- (11) 『大正藏』圖像部四、三四頁。
- (12) 『別尊雜記』卷第十三「寶樓閣曼荼羅(其一)」・「(其二)」(『大正藏』圖像部三、一六五頁・一六六頁)。
- (13) 本文一二頁、不空訳、菩提流志との対照表参考。
- (14) 同右。
- (15) 同右。
- (16) 同右。
- (17) 不空訳、菩提流志訳では「畫像品第八」であるが、明本によると「畫像品第九」となる。(『大正藏』一九、六五二頁、中段)。
- (18) 『大正藏』一九、六二八頁、中段、四行目―下段、四行目。
- (19) 同右、六四四頁、上段、最後―中段、二六行目。明本によると「畫像品第九」となるが、内容はほぼ一致しているのでここでは別と考えない。
- (20) 前掲興然訳、「寶樓閣經曼荼羅(其一)」(『大正藏』圖像部四、二二〇頁)。
- (21) 「寶樓閣曼荼羅(其一)」(『大正藏』圖像部四、七六二頁)。
- (22) 「寶樓閣曼荼羅(其二)」(『大正藏』圖像部三、一六六頁)。

2、曼荼羅(二)

楼閣と諸尊が配された内院と、それを取り囲む外院との二院から構成された図2に類する宝楼閣経曼荼羅(二)は、曼荼羅(一)より複雑な様相をなしている。

まず内院から見ると、中央には師子座上に、説法相釈迦如来結跏趺坐像一仏のみが宝形造りの楼閣中に描かれ、仏の左辺楼閣外には二臂金剛手菩薩立像が、右辺楼閣外には二臂摩尼金剛菩薩立像が配されている。楼閣正面の下段には、火焰光に包まれた百輻輪を乗せて、一本の七宝蓮華が描かれ、根元は方形の水池となっている。その右辺には四面十六臂の摩尼金剛菩薩像と、左辺には四面十二臂の金剛手菩薩像が、蓮華座上に坐している。この二菩薩と宝輪との間には持誦人が一人ずつ坐し、それら七尊と宝輪をめぐるせて、四大天王が配置されている。

内院下段には、十六臂摩尼金剛菩薩の前辺に二臂の餉棄尼天女跪坐像と、その背後に二臂花齒天女跪坐像が、そして、十二臂金剛手菩薩の前辺には二臂吉祥天女跪坐像と、その後方に四臂金剛使者天女跪坐像が配され、さらに楼閣上段の虚空中には、二飛天が、従者を伴ってそれぞれ雲上に乗り、左右から楼閣頂の宝珠に向かっていて、雲尾は外院にまで延びている。内郭各辺には各々門が描かれ、下辺東方には五色絵の幡、南門には大吉祥天女、西門には八臂金剛使者天女、北門には二臂餉棄尼天女が配されている。内院の四隅には賢瓶が、そして外院とを仕切る郭部分には如意宝珠による連続模様が施されている。

次に外院であるが、四辺に各々門が配され、下辺東門内には、七子を伴った訶梨帝母遊戲坐像が、南門中には八臂自在天遊戲坐像が牛座上に、西門には花齒羅刹女、そして北門内には八臂毘摩天女遊戲坐像が、七姪女と伴に描か

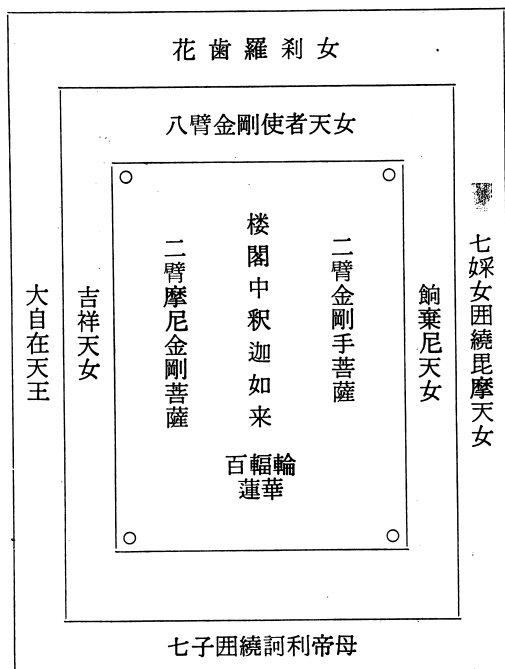
れている。外院の四隅にはやはり賢瓶が配され、ほかに三十二の五色幡が内周を等間隔でめぐらしている。外周の縁には宝花による裝飾がなされている。以上が全体の様相である。

樓閣を中心とした内院部分においては一見、曼荼羅(一)に類似としながらも、七尊多く描かれていることになり、配置も異なっている。ここでは樓閣内に釈迦一仏のみを配することや、二臂の金剛手菩薩と摩尼金剛菩薩を、それぞれ仏の左辺と右辺に立像であらわしていること、四大天王が内院の諸尊を囲んでいること、また内院各門の南門中に吉祥天女、西門中に金剛使者天女、北門中に餉棄天女を配し、外院各門には、東門中に訶梨帝母、南門中に大自在天王、西門中に花齒羅刹女、北門中に毘摩天女の各尊像が描かれていることなどから、この図は『寶樓閣經』卷中「建立曼荼羅品第七」⁽¹⁾の内容を取り入れているものと思われるので、次に不空訳を引用してみたい。

「建立曼荼羅品第七」⁽²⁾

……於小壇中畫七寶樓閣。於樓閣中畫一佛形像。作說法相。佛前作一蓮華。七寶莊嚴。於蓮華胎中畫作一輪。其輪百輻齊輞具足。以金莊嚴。輪外畫焰光。其蓮華莖吹琉璃色。佛左邊畫金剛手菩薩。而作忿怒形。右手執金剛杵左手執白拂。右邊畫摩尼金剛菩薩。種種瓔珞莊嚴其身。左手執持寶珠右手執白拂。四角各畫四大天王。……於中壇南門中。畫大吉祥天女。種種瓔珞莊嚴其身。北門中畫餉棄尼天女。壇西門中畫金剛使者天女。八臂持種種器仗以種種瓔珞莊嚴。……其中壇四門外。各立吉祥標門。其大壇東門中畫訶利帝母。七子圍繞。於南門中畫大自在天王。於西門中畫花齒羅刹女。於北門中畫毘摩天女。顏貌美麗有七婢女圍繞。……

この内容に則して諸尊を図式化してみると参考図(Ⅰ)のようになる。



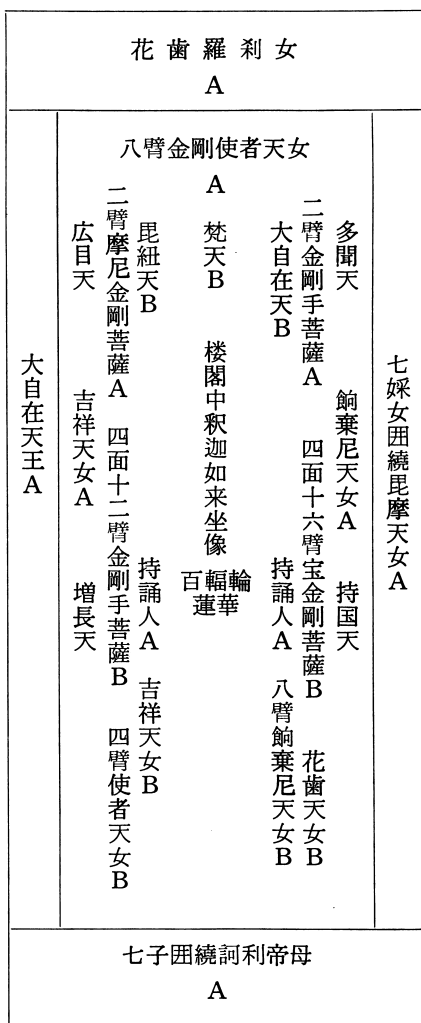
○=四天王

参考図(Ⅰ)

したがって曼荼羅(二)は、「建立曼荼羅品」中の諸尊より十尊多いことになり、かならずしも經典に拠ってはいないことが明らかとなる。

次に「建立曼荼羅品第七」と「畫像品第八」に説かれる諸尊を表にまとめ、さらに曼荼羅(二)を図式化し、建立曼荼羅品のみに説かれている尊像をA、画像品のみに説かれているものをBとして、配置を示すと参考図(Ⅲ)のようになる。

<p>不空訳「建立曼荼羅品第七」 (菩提流志訳「結壇場法品第七」)⁽³⁾</p>	<p>不空訳「畫像品第八」 (菩提流志訳「畫像品第八」)</p>
<p>▲小壇(小壇) ○七宝楼閣中說法相釈迦如来一仏(如来一仏像) ○一蓮華・百輻輪(一蓮華・百輻輪) ○仏の左辺―二臂金剛手菩薩(二臂執金剛菩薩) ○仏の右辺―二臂摩尼金剛菩薩(二臂宝光金剛菩薩) 薩) ○四角各―四天大王(四大天王) ▲中壇(小壇) ○南門中(東門内南辺)―大吉祥天女(吉祥天女) ○北門中(北辺)―餉棄尼天女(餉棄尼天女) ○西門中(壇中門心)―八臂金剛使者天女(八臂金剛使女神) ▲大壇(小壇門外) ○東門中(小壇東門外)―七子圀邊訶梨帝母(七</p>	<p>○七宝楼閣中說法相如来坐像(一如來說法像) ○一蓮華・百輻輪(千輻輪) ○仏の右辺―四面十二臂金剛手菩薩半跏坐像(四面十二臂執金剛菩薩半跏坐像) ○仏の左辺―四面十六臂宝金剛菩薩半跏坐像(四面十六臂摩尼金剛菩薩半跏坐像) ○宝金剛菩薩(摩尼金剛菩薩)下―八臂餉棄尼天女跪坐像(八臂餉棄尼天女胡跪像) ○金剛手菩薩(金剛手菩薩)下―吉祥天女跪坐像(吉祥天女胡跪像)〈持物宝器〉 ○吉祥天女後―笑面四臂金剛使者天女(笑面四臂使者天女)</p>



参 考 図 (Ⅱ)

〈A〉

子圍繞鬼子母神)

○南門中(南門外)——大自在天王(大自在天神)

○西門中(西門外)——花齒羅刹女(花齒羅刹女)

○北門中(北門外)——顏貌美麗七姪女圍繞毘摩天女(七姪女圍繞毘摩天女)

〈B〉

○餉棄尼天女後——花齒天女(花齒羅刹女)〈素服

・持物花〉

○蓮華下——四大天王(四天王)

○池岸上——持誦人跪坐(多衆仙人跪坐)

○宝樓閣上、虛空中(大像上)——梵天毘紐天大自在天(梵天帝釈大自在天)

宝楼閣経曼荼羅(二)に類するものはこれらのことから、大よそ「建立曼荼羅品」と「畫像品」の混成から成る造図といふことができる。

この曼荼羅中には、外院の下方東門において、七子を伴った左舒相遊戲坐の訶梨帝母像が配されている。

(注)

- (1) 不空訳の「建立曼荼羅品第七」は、菩提流志訳では「結壇場法品第七」に相当する。
- (2) 『大正藏』一九、六二七頁、中段、二一行目―六二八頁、上段、二八行目。
- (3) 『大正藏』一九、六四三頁、中段、二七行目―六四四頁、上段、二五行目。

3、曼荼羅(三)

曼荼羅(三)として、京都東寺観智院蔵本(図3)をあげておきたい。一幅の卷子本の形式をとっているが、「建立曼荼羅品」と「畫像品」に説かれている諸尊が描き示されている。

尊像は順次描かれているが、図様は三つの群から成っている。

まず九尊が持誦人を中心に配されている。右端から蓮華を持つ花齒、その上に宝珠を捧げる餉棄尼の二天女跪坐像、そして四天王のうち持国天と多聞天が配され、その左下方に香爐を手に一人の持誦人が坐す。左側には広目天と増長天、その背後に宝器を捧げる吉祥天跪坐像、下方に宝花を手にした四臂の金剛使者天女跪坐像が配されている。

この九尊は「畫像品」によるものである。

その次には、釈迦如来の仏手印を中心とする十二尊が二段で構成されている。上段は仏手印を中心にして右側には

四面十六臂宝金剛菩薩坐像、その右には二臂の金剛手菩薩立像と背後に金剛使者天女⁽²⁾と思われる跪坐像、仏手印の左側には四面十二臂金剛手菩薩坐像、その左には摩尼金剛菩薩と、吉祥天女⁽³⁾と思われる跪坐像そしてその左には八臂の毘摩天女遊戯坐像が七婢女に囲まれて描かれている。

下段は、金剛手菩薩立像の下には花齒天女⁽⁴⁾と思われる坐像、左に餉棄尼天女⁽⁵⁾と思われる八臂の坐像、牛座に乗る八臂大自在天と、七子を伴う訶梨帝母の左舒相遊戯坐像が配されている。このうち四面十六臂宝金剛菩薩坐像と、四面十二臂金剛手菩薩坐像の二尊は「畫像品」に、他の諸尊は「建立曼荼羅品」に説かれているものである。

最後には、四大天王が、持国天、多聞天、広目天、増長天の順に描かれている。

(注)

- (1) 『大正藏』圖像部五、八四一頁—八五四頁。
- (2) 『寶樓閣曼荼羅』(『大正藏』圖像部五、八四一頁—八五四頁) 中では、名未詳侍者。
- (3) 同名、名未詳侍者。
- (4) 同名、名未詳供養者。
- (5) 同右、尊名未詳(餉棄尼? 花齒羅刹?)

4、曼荼羅^(四)

『曼荼羅集』及び『覺禪鈔』所載の「寶樓閣曼荼羅(其二)」(図4—①⁽¹⁾・図4—②⁽²⁾)に類するものを宝樓閣經曼荼羅^(四)として、ここに様相をみていきたい。前者は尊形であり、後者は種子曼荼羅であるが、文字曼荼羅としては他

に、京都仁和寺藏本の「寶樓閣曼荼羅⁽³⁾」などをあげることができる。

この曼荼羅の特徴は、三重院から成る方形曼荼羅で、「畫像品」所説に準ずるものと思われ、内院に三尊、第二院に八尊、外院に四尊と四隅に三昧耶形の三鈴が配されている点にある。

内院の upper 段には釈迦如来、下段右には宝金剛菩薩、左には金剛手菩薩が、第二院には下辺南には地天、西に金剛使者天女、北に梵天、東に花齒天女と、四隅に東南から、餉棄尼天女、吉祥天女、毘紐天、大自在天が配され、外院の東南西北には、持国、増長、広目、多聞の四天王を配している。

この中で地天は經典にあてはまらず、また南向きの図としてしていることは、東向きとする曼荼羅(二)と相違するところである。

曼荼羅(四)には訶梨帝母像は含まれていない。

四種の宝樓閣経曼荼羅のうち「畫像品」にのみ基づくものは(一)、それに類似するものは(四)ということになり、(二)と(三)においては「建立曼荼羅品」と「畫像品」の混成によるものであり、「建立曼荼羅品」のみに拠るものはみられない。

曼荼羅中の訶梨帝母は、「建立曼荼羅品」に説かれるものであるから、したがって宝樓閣経曼荼羅(二)に類するものの、外院下辺の東方の門に配されることになり、また、(三)にも、描かれている。

では宝樓閣経曼荼羅にみる訶梨帝母の形像はどのようなものであろうか。

(注)

- (1) 『曼荼羅集』興然訳「寶樓閣經曼荼羅(其二)」(『大正藏』圖像部四、二二二頁)。
- (2) 『覺禪鈔』「寶樓閣曼荼羅(其二)」(『大正藏』圖像部四、七六三頁)。
- (3) 『大正藏』圖像部五、七三二頁。

二、宝楼閣経曼荼羅にみる訶梨帝母像様について

『寶樓閣經』巻中の「建立曼荼羅品」に、訶梨帝母は説かれているのであるから、曼荼羅(一)及び(四)などのように、「畫像品」のみに拠った曼荼羅には訶梨帝母像は表されていないことを述べてきた。

宝楼閣経曼荼羅(二)にみる訶梨帝母は、経儀に従い七子に囲まれ、外院下辺、東門の中に配されている。

他の諸尊と共に、火焰の輪光を負い、宝冠と唐衣を着け、天衣をまとった坐像は、毘輪座上に左舒相の遊戲坐勢をとり、左方を向いている。右手で一児の腰をかかえて抱き、左手では円形の宝珠を捧げている。抱かれている嬰兒は、左手を訶梨帝母の持つ宝珠に差しのべている。あとの六児は、座上で訶梨帝母の足を囲んで遊ぶように描かれている。右傍の三児は立ち、左三児は坐しているが、手前にあたる二児のうち、向かって右側のかがんでいる子供は、右手を左側の子供の左手方向に向けている。

これと同形の像は、曼荼羅(三)の京都東寺観智院蔵『寶樓閣曼荼羅』にも描かれており、また前述のごとく、『覺禪鈔』の中で、七子の像として、圓城寺五仏院蔵本の宝楼閣経曼荼羅から引用し、図示している像と一致している。

訶梨帝母に伴う子供の数は、眷属としては、千人とも百人とも、十人とも諸説があるが、造形の上からは、我国では一子及び、儀軌に従えば、五子、七子、九子などで表現されている。不空訳別本『訶利帝母經』⁽¹⁾には九子、『訶梨帝母經』⁽⁴⁾『歡喜母法』⁽⁵⁾『別尊雜記』⁽⁶⁾では五子が説かれている。

宝楼閣経曼荼羅に含まれている訶梨帝母像様の特徵としては、火焰の輪光を有していること、左舒相の遊戲坐勢を

とり、七子を伴っていることなどの点をあげることができよう。

(注)

- (1) ガンダーラ像には数子を伴うものもある。
- (2) 『覺禪鈔』では、「御抄云、故定覺闍利云」として六子の画像を説いている(『大正藏』圖像部五、四六一頁)。また『別尊雜記』には、八子の像を所載している(『大正藏』圖像部三、六〇一頁)。
- (3) 『大正藏』圖像部五、四六一頁、上段、一四行目—二〇行目。
- (4) 『大正藏』二一、二八九頁。『訶利帝母眞言經』の異名は、『訶利帝母眞言法』、『訶利帝母法』。
- (5) 『大正藏』二一、二八六頁。『大藥叉女歡喜母并愛子成就法亦名訶哩底母經』の異名は、『大藥叉女并愛子經』、『歡喜母愛子成就法』、『訶哩底母法』、『訶哩底母經』。

結
び

訶梨帝母は、三帰五戒を受けて、仏教に導入された⁽¹⁾。黒業による黒報の因果のため、人間から夜叉女となり嬰兒を奪って食っていたが、仏教帰依と同時に仏教擁護の立場から、伽藍や厨房^{ちゆうぼう}を守り、門守としての役目を任されている。古来疱瘡の神として、また子女のための守護神として崇拜されていたこの女神は、訶梨帝母祈禱の本尊として用いられるようになった。

訶梨帝母の修法は、独尊⁽²⁾で用いられると同時に、従来より、諸尊と共に、忿怒の相をもって用いられてきたものではないかと察せられる。鬼形の鬼子母神の出現以前に儀軌にのぼっており、すでに述べた十六大護図、あるいは本図の他に、四種護摩本尊及眷属図像等にも含まれている。

宝楼閣経曼荼羅は、鈎召、滅罪、息災や、あらゆる増益を祈願する宝楼閣経法の本尊として用いられるのである。釈迦如来の前面にあたる正門、東方の外門中に配置されている訶梨帝母像は、南方に吉祥天と大自在天、西方に金剛使者天女と花齒羅刹女、北方に餉棄尼天女と毘摩天女の二尊ずつが内門と外門に配されているのに対し、七子に囲^こ繞^{りょう}された一尊で表されている。

胎藏曼荼羅においては、特に東方の門にのみ、守門が四尊配されている。インドなどでは古くから薬叉女⁽³⁾(ヤクシニ)は、樹神や、門を守護する女神として、数多く造像されている。訶梨帝母もまた以前は、薬叉女であった。

仏教導入と同時に伽藍や厨房の守護神となった訶梨帝母像を、宝楼閣経では、東門に配するように説いている。楼

閼の正門に独尊で配置させる点で、宝楼閼経曼荼羅は、この女神の本来の任務を充分に考慮した上で作図なされたものと言ふことができよう。

(注)

- (1) 『大藥叉女歡喜母并愛子成就法』では、三帰五戒を、『訶利帝母真言經』では三帰五戒菩提心律儀戒を授けたことになっている。
- (2) 我国では鬼形鬼子母神の独尊による修法が知られているが、ネパールでは、現在、なお、柔和尊による修法が行なわれている。前掲拙稿「ネパールにおけるハーリティーについて——調査報告——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第六号、昭和五九年)参照。
- (3) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第三十一(『大正藏』二四)参照。

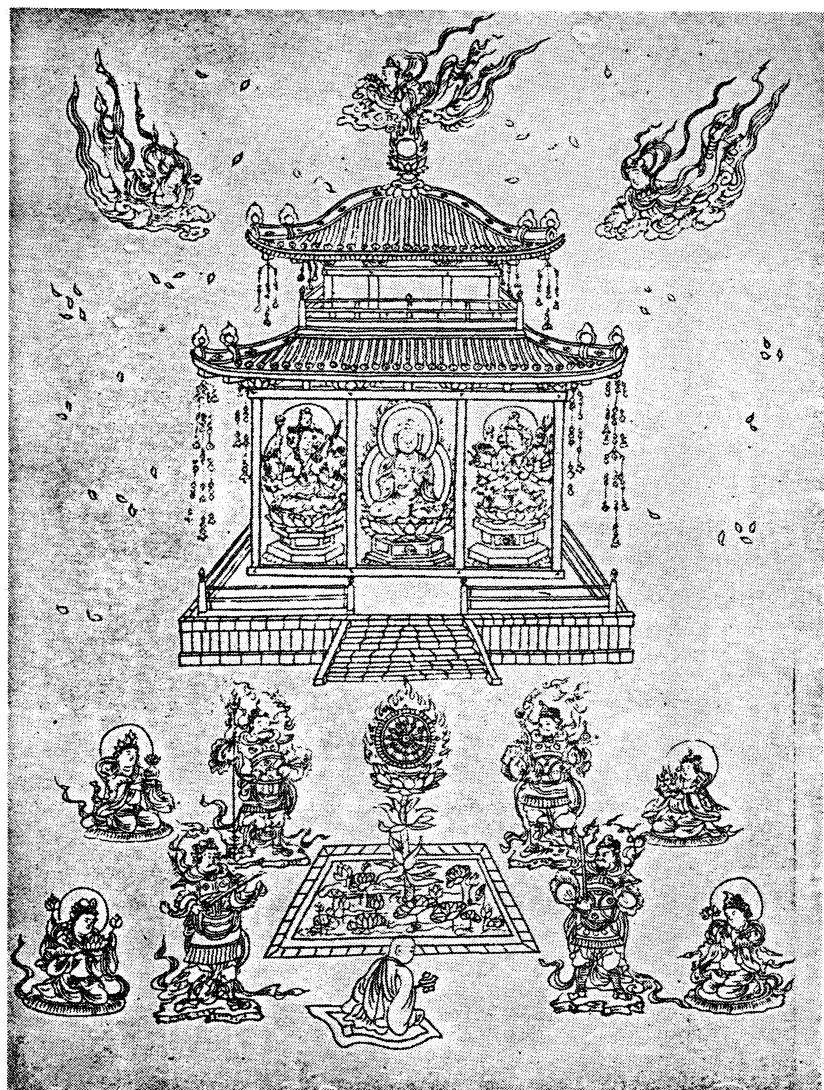


圖 1—① 「寶樓閣經曼荼羅(其一)」『曼荼羅集』



图 1—② 「寶樓閣曼荼羅(其二)」『別尊雜記』

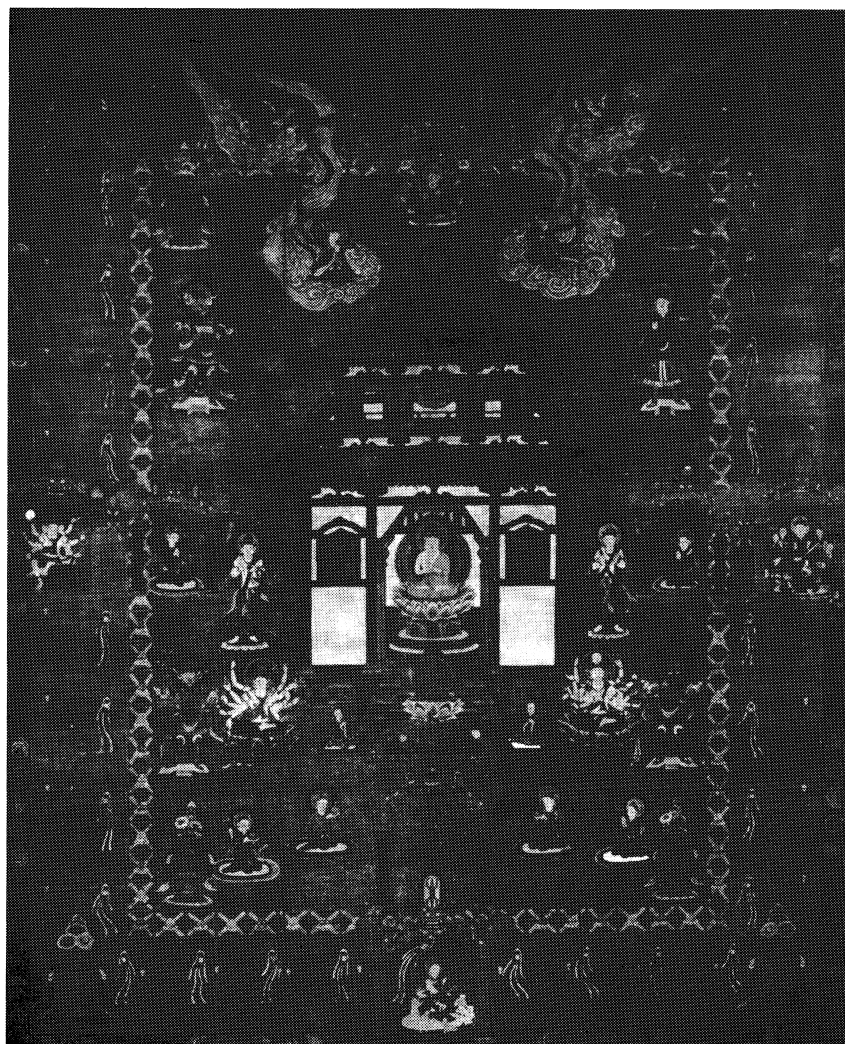
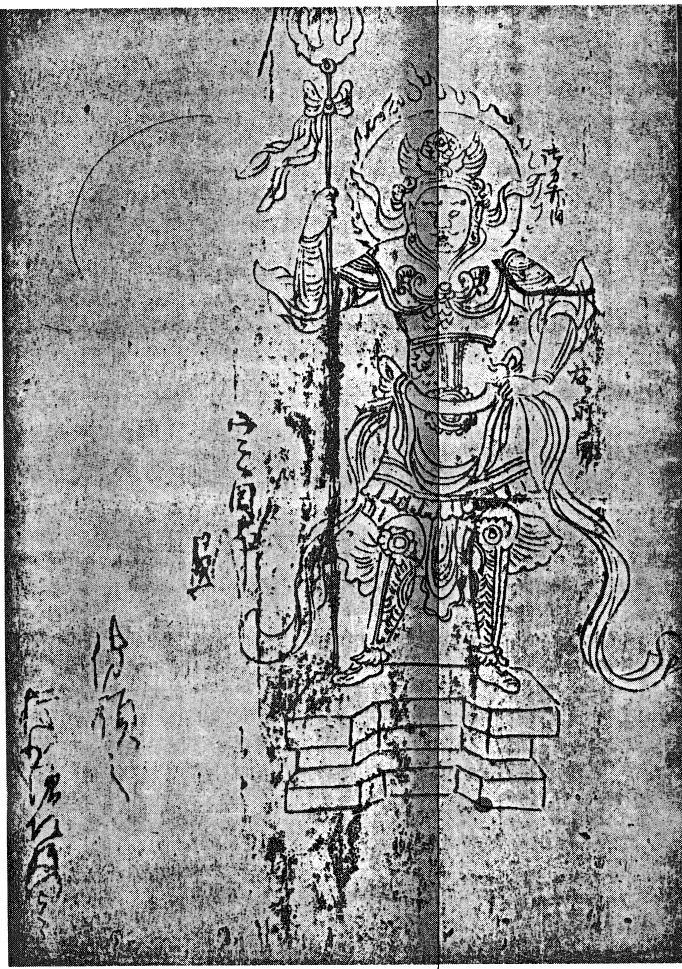


圖2 「寶樓閣曼荼羅」 (個人藏)



图3 「寶樓閣曼荼羅」京都東寺觀智院藏





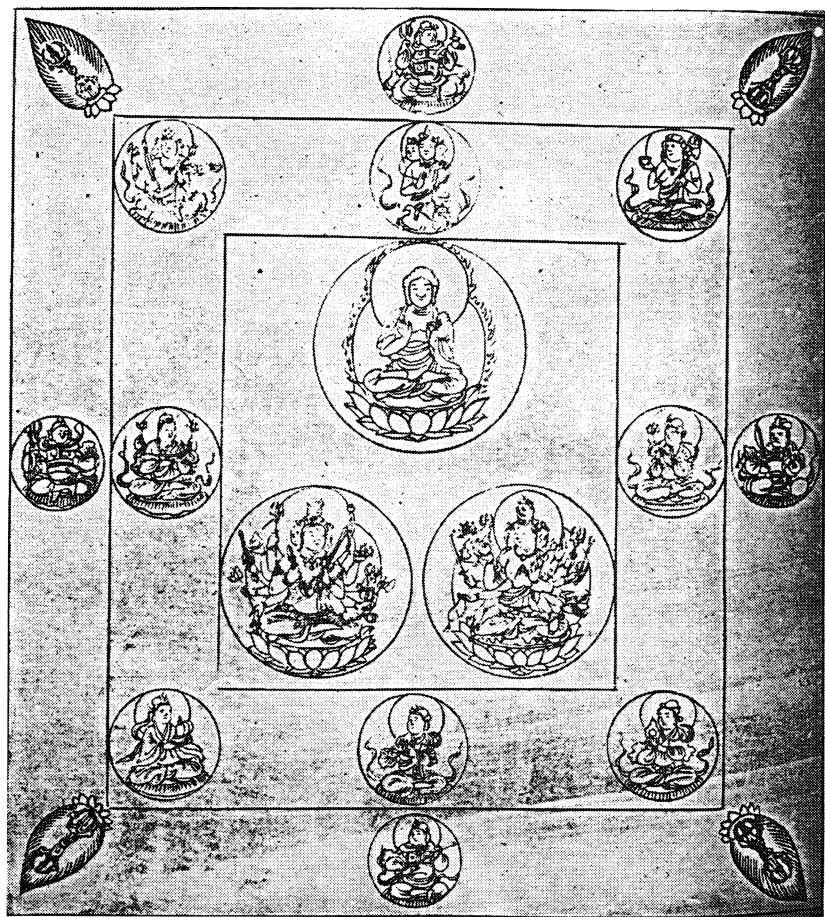


圖 4—① 「寶樓閣經曼荼羅(其二)」『曼荼羅集』

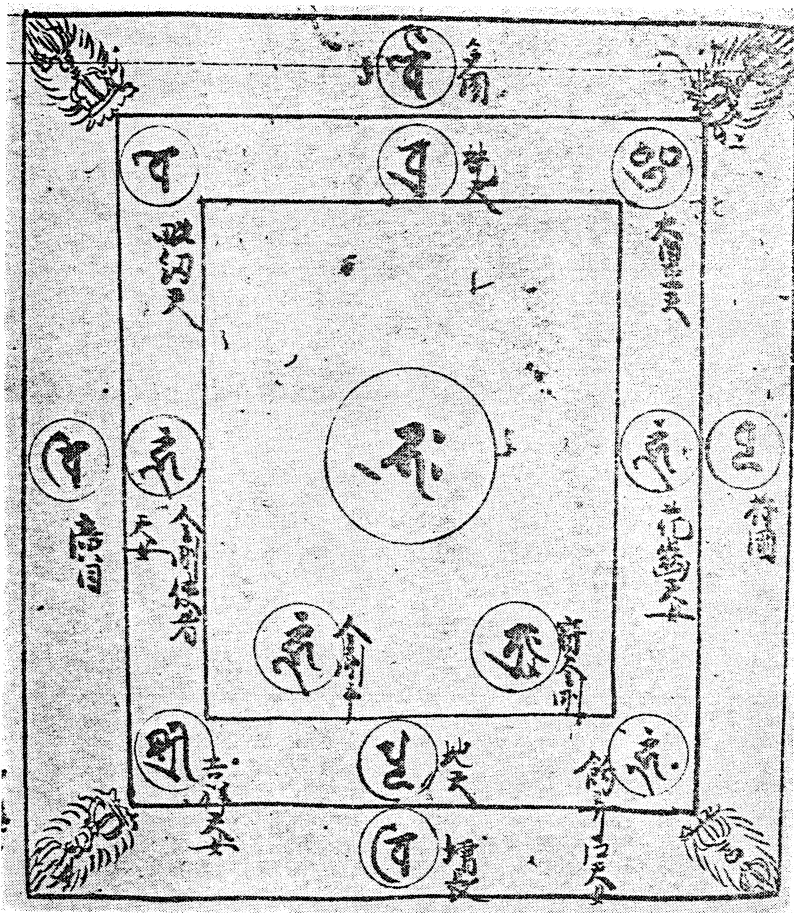


圖 4—② 「寶樓閣曼荼羅(其二)」『覺禪鈔』